優　秀　賞

千葉大学松戸アカデミック･リンク 緑のテラス

株式会社ランドプランニング／国立大学法人千葉大学
萩野一彦
国立大学法人千葉大学
木下剛・三谷徹（現東京大学）

園芸の知の結

アカデミック･リンクは「感性に優れた考える学生」を育成する新たな図書館機能のコンセプトである。自然に触れ、伝統に学び、多様な人々と交わることで、総合的な人材を育成し、園芸の知の結節点となることを企図した。

アクティブラーニング

2階のアクティブラーニングスペースでは、訪問者が自由に交流でき、自然や庭園を眺望できる。外部に対しても活動が風景として発信される場となり、園芸の知の結節点を体現する。

庭園と“ひとつながり”の図書館

緑のテラスは、失われていた庭園との関係を平面・立体的に再生し、庭園と“ひとつながり”の図書館を具現化するものである。また、全体が、主機能のある2階へのメインアプローチでありエントランス空間となる。

地域環境の要となるグリーンインフラ

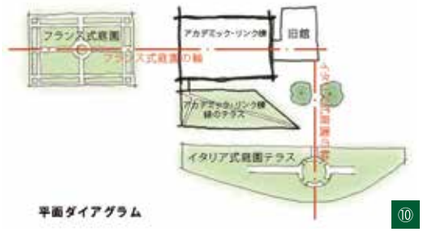
環境（雨水の流れ､生物など）や学生の管理活動を「見える化」することで、生活動線利用され、庭園ガイドツアーも行われる開放的なキャンパスならではのグリーンインフラを形成する。

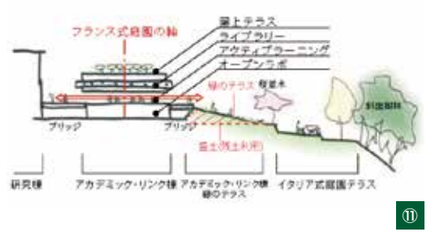
作品概要

作品名	千葉大学松戸アカデミック･リンク 緑のテラス
所在地	千葉県松戸市松戸648（千葉大学松戸キャンパス内）
発注	国立大学法人千葉大学
設計	株式会社ランドプランニング／国立大学法人千葉大学
設計協力	国立大学法人千葉大学
建築設計	株式会社佐藤総合計画（家具設計：丘の上事務所）
監理	国立大学法人千葉大学園芸学部
施工	アゴラ造園株式会社
設計期間	2017年8月～2020年10月
施工期間	2020年5月～2020年12月
規模	7,000㎡
主要施設	大学図書館､アクティブラーニングスペース､キャンパスランドスケープ､緑のテラス､雨庭（レインガーデン）､緑段､庭園空間構成を再生するアプローチ空間

作品評

緑のテラスは千葉大学園芸学部の新しい図書館である『アカデミック･リンク松戸』のランドスケープとして整備された。応募者は緑のテラスの企画提案者・設計者となり、大学学内での様々な調整、図書館設計との調整、募金事業にかかわった。松戸キャンパスは近代庭園をはじめランドスケープとともに発展してきたが、急整備等を求められた近年の施設開発によりかつての秩序を失いつつあった。アカデミック･リンク及び緑のテラスは、キャンパスの南北・東西の軸線、立体的な庭園空間の結節点となり、キャンパス風景の要となるよう計画された。建築部分に降った雨は、雨庭に流れ込み、地下浸透・一時貯留されて排水管への流入遅延・削減するシステムとなっている。この取り組みは大学キャンパスにおけるグリーンインフラ導入の先進事例である。整備後は学生による管理組織『雨庭組』をつくり、継続的な管理体制が構築されて教育の場となっている。本作品は大学キャンパスの改修事業において企画提案・設計・建設・維持管理等に主体的にかかわった事業であり、ランドスケープの研究・教育・実務の面から高く評価され、優秀賞となった。





①松戸アカデミック･リンクと緑のテラス全景
②平常時の雨庭
③降雨時の雨庭
④在来種による四季の演出（写真の花はカワラナデシコ）
⑤「雨庭組」による管理活動の様子
⑥アクティブラーニングスペースでの学習・交流活動の様子
⑦大学祭での使いこなしの様子
⑧緑段：緑のテラスとアカデミック･リンクとの隙間の混垣
⑨4段のテラスの構成（立体的計画）
⑩軸線の構成（平面ダイアグラム）
⑪断面ダイアグラム

4段のテラスと軸線

イタリア式庭園の中心性の再生のため、緑のテラスは、2段のイタリア式庭園、雨庭の段とあわせ、4段のテラスを構成し、庭園と“ひとつながり”の図書館を具現化した。平面的な配置計画においては、南北はイタリア式庭園の軸、東西ではフランス式庭園の軸を受け､庭園から眺めた際の正面性をもたせている。

雨庭（レインガーデン）

建築部分からはデザインされたガーゴイルを通じ、またテラス部分や通路からも、雨水が「雨庭」に集水・貯留・浸透され、流出抑制するシステムとし、雨水の流れを「見える化」した。植栽種は「乾湿変化に耐えうる植物」、「地域環境に馴染んだ植物」とし、四季の演出のため、通年の順次開花を考慮した在来野草種とした。また、順応的管理の実験的フィールドとして研究活用するなど、大学におけるGI導入の先進例となることを考慮した。

「雨庭組」による管理活動と使いこなし

雨庭組は、学生で構成された雨庭管理団体である。活動は1、2回／月の頻度で、芝生の管理や清掃、スケッチ会などのイベント企画、植栽変化のモニタリング等、通年で行っている。また、大学祭では、ステージの観客席としてテラスが利用され、当日芝生に人々が集まる姿に、使いこなしの可能性が見えた。

庭園のレガシーから未来のキャンパスへ

かつてあった庭園群によるキャンパスの空間構成が失われようとしていたものの、今回の整備により、空間秩序の継続的再編の方向性が見えてきた。また整備だけでなく、樹林も含めた管理や活用によっても再編を行っていく必要が課題化された。